



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生における「自分らしさ」と就業意識
Author(s)	菅原, 健太
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 107, 227-247
Issue Date	2009-06-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.107.227
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38716
Type	departmental bulletin paper
File Information	107_012.pdf



高校生における「自分らしさ」と就業意識

菅 原 健 太*

“Characteristics of Oneself” and Consciousness of Work-Starting in a High School Student

Kenta SUGAWARA

【要旨】札幌市の高校三年生を対象として行った調査結果をもとに、自己意識と就業意識の関連について分析した。自己意識における因子である、自己の確立性に関する「自己確立因子」と自己の未決定性に関する「自己未定因子」とが共存しうることから、両者を兼ね備えたケースを「自己多元型」、それ以外を「非・自己多元型」とし、両者の特徴を比較したところ、両者は就業意識における「自分らしさ」の位置付けという点で異なっていることが分かった。そこから、近年注目される「多元的自己」と同様の構造をもつ自己多元型は、これまでの発達観やキャリア観とは齟齬をきたすような特徴をもつものなのではないか、という仮説を提示する。

【キーワード】若者、高校生、自己意識、就業意識、多元的自己

はじめに

本稿では、「自分らしさ」という言葉で表現されるような、ある種の自己意識が、高校生の将来についての意識——特に、現時点においては学生であるため、未知なる将来としての「就業」や「職業」についての意識——と、どのような関係をもっているのかについて明らかにする。

その前段として、日本の青年論・若者論におけるE. H. エリクソンの位置付けと、近年キャリア教育の分野でたびたび参照されるD. E. スーパーの位置付けを、発達観の相違という点から比較し、スーパーの理論が本質的にもつ規範的な発達観の問題性を、「多元的自己」というキーワードから指摘する。

続くデータ分析では、多元的自己と呼びうるような特徴をもったタイプを、そうではないタイプと比較するかたちで、そこにある「自分らしさ」や就業意識（将来意識、職業生活意識）の特徴、関係性を見ていく。

最後に、多元的自己という自己意識の構造がどのような意味をもちうるのかについて、特に時間意識という観点から指摘する。

1. 日本の青年論・若者論におけるE. H. エリクソンの位置付け

以下では「自分らしさ」というものをキーワードとして考察を進めていくのだが、「自分

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

らしさ」、自己意識、アイデンティティといったものについては、これまでに数限りない研究がある。それらを概括することは紙幅の関係上割愛させていただくが、本稿の内容に関わって、触れておくべき人物がいる。それはE. H. エリクソンである。

若者論における自己・アイデンティティについて考える際に、E. H. エリクソンという存在は、その理論だけではなく、その取り扱われ方という点においても重要な位置を占めている。この点について少し触れておく必要があるだろう。

1. 1 E. H. エリクソンの「登場」と「退場」

日本においては、1960年代末からの学生運動の盛り上がりの中で、限定された層ではない、広範な広がりをもったかたちで「青年」という存在が注目されるようになった。その時、「青年の異議申し立て」についての有力な説明装置を提供したのがE. H. エリクソンであったとされている（岩佐1994）。そこでは例えば「アイデンティティ（拡散）」や「モラトリアム」といった用語が青年を理解するためのキーワードとしてしばしば引用された。

しかし、70年代後半以降、例えば栗原（1981）が、社会に対する対抗ではない「内面化されたモラトリアム」の発生、そして「モラトリアムの機能不全」として説明したような社会変化の中で、80年代に入ってエリクソンは青年論の舞台から「退場」することになった。小谷（1994）はそうなるに至った背景を二点説明している。

一つは、エリクソンの理論が、例えばアイデンティティが「主体性」として訳されたように、近代的自我の確立など戦後啓蒙主義以来の関心から受容がなされたのだが、80年代の「ニューアカ」ブームの中で、戦後啓蒙主義は完全に衰退し、エリクソンの理論が受容されていた基盤が崩れたこと。

もう一つは、同じく80年代の消費主義の興隆の中、大人と子どもの「ボーダーレス化」が進行することで、移行期としての青年期という位置付けが重要性を失ったこと。

これらの理由により、80年代以降エリクソンの理論は積極的に取り上げられるものではなくなり、同時に、発達段階論的に論じられる「青年論」は、消費文化との関係で論じられる「若者論」に変わっていった。これが、日本の青年論・若者論におけるエリクソンの登場と退場であり、発達段階論的な青年論の退場と、消費文化的な若者論の登場である。

このような経緯を踏まえた上で、中央教育審議会が1999年に出した答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で初めて使われ、さらに文部科学省が2003年に出した「若者自立・挑戦プラン」以降、たびたび使われることになる「キャリア教育」について考えてみると、そこに奇妙な符合があることが分かる。

例えば、「若者自立・挑戦プラン」の目標は「若年者の職業的自立を促進」することとされているが、そこには「働く意欲」や「やる気」という言葉が付属しており、少なくともこの「職業的自立」が経済的なものだけでなく、精神的な自立を要求したものであることが分かる。

また、これを出す必要があった原因に、「将来の目標が立てられない、目標実現のための実行力が不足する若年者が増加していること」「社会や労働市場の複雑化に伴う職業探索期間の長期化」などが挙げられている。これはつまり、いわゆるモラトリアム期間への注目となるだろう。

さらに、具体的政策について、「学校の教育活動を通じ、子どもの発達段階を踏まえた組

織的・系統的なキャリア教育（新キャリア教育プラン）を推進する」とも述べており、キャリア教育が前提とする発達段階は、学校教育の段階、要するに年齢と対応しているということが分かる。

つまり、「若者自立・挑戦プラン」というかたちで現れた青年論は、そのプランが必要であると言うための根拠を、60年代後半にエリクソンが登場してもはやされた社会的背景に、非常に近似したかたちで置いている。

このように、一度「退場」したはずのエリクソン理論は、青年論として「再登場」するための基盤を得たかのように見える。しかし、少なくともキャリア教育という分野において、実際には再登場はされなかった。代わりに、キャリア教育において再登場¹したのがD. E. スーパーであった。

1. 2 D. E. スーパーの「登場」

職業心理学者でありキャリア・カウンセラーであるスーパーは、キャリア発達の理論的アプローチに関する14の「命題」をまとめあげ、他にも「ライフキャリア・レインボー」の図などは様々な論者によって参照されている²。もちろん、キャリア教育で参照される研究者はスーパーに限られるわけではないが、山田（2007）では「職業心理学の第一人者」と表現されるなど、中心の人物の一人であることは間違いない。

もちろん、エリクソンは発達心理学者であり、スーパーは職業心理学者でありキャリア・カウンセラーであるため、エリクソンからスーパーへの移行は必然的なものであるかもしれない。しかし、M. ジャヤシンゲ（2004）で「人間の発達段階理論を信奉した先駆的発達心理学者であるブエラー（Buehler, C., 1993）やエリクソン（Erickson, E.H., 1963）の諸理論に基づき、スーパーは生涯にわたる職業的自己概念を5段階の発達過程に整理した」とあるように、スーパーのキャリア発達理論や、それに付随するいくつかの理論は、少なくともスーパーが最初の論者ではなく、エリクソンらの影響が存在している。それゆえ、そこでは、70年代青年論において既に紹介されていた理論のいくつかが再登場している。

では、何故、エリクソンではなくスーパーなのだろうか。つまり、青年論から若者論への移行というかたちで、80年代に入る時に捨てられたエリクソンと発達段階論的青年論のうち、キャリア教育というかたちで後者のみが再登場した理由、もう少し言えば、何故エリクソンではなくスーパーでなければならないのか、その必然性はどこにあるのか。この点について考えることは、キャリア教育というかたちで注目される「発達」がどういうものであるかについて考えるための一つの手掛かりになるだろう。

1. 3 二つの発達観

それでは、スーパーにおける発達とはどういうものであるのだろうか。スーパー（1977）が「職業的発達とは自我概念の発達と完成である」、ないし「カウンセラーが職業的発達を進めれば、それと同時に、人格的発達も進む」と言う時、そこにある発達は「職業的発達が一つの連続であり、職業的成熟が、到達した発達程度を示すところの、この連続上の一点」であるという前提が置かれている。

つまり、スーパーにおける発達は、直線的なものであり、段階的なものである。しかもそれは、柳井（2001）で「職業生活に限定したものではなく、人間の生涯を視点においた生き

方や社会的役割との関連でとらえられている」とあるように、人間の発達全体に関わるものである。

一方、エリクソンにおける発達理論は、必ずしも直線的で段階的なものではない。確かにエリクソンの発達理論においては、 8×8 のマスで描かれた発達段階の図表（チャート）は有名であり、たびたび参照されるが、西平（1993）がエリクソン研究の現状として「言葉や図表だけが独り歩き」している恐れがあると指摘するように、それはある意味では「見取り図」なのであり、必ずしも「順路」ではない。穿った見方をすれば、80年代にエリクソンが「退場」させられたもう一つの原因は、この「独り歩き」が生み出したものでもあったとも言える。

加えて西平（1993）は、エリクソンが図表の誤用に対する警戒として語った文章を引用しながら、その発達観が到達や達成という流れではないこと、具体的には「自我違和感」を解消ではなく「統合」する、というかたちで行われる「危機の解決において獲得される徳（virtue）」が、「一度獲得すれば、それで完成されてしまうというわけではない」ものであると指摘している。つまり、発達段階における達成基準があるとして、その達成（された成果）はあくまでも「肯定的なものと否定的なものの一定の比率」なのであり、その意味で、達成という現象はある一時点を切り取ったもの、無時間的なものである。逆に、時間という軸を入れた上でこの達成を表すならば、それは「達成／未達成」が可変する比率・割合で存在する混合物であるということになる。この点において、スーパーなど、キャリア教育の場面で求められる「達成」とは齟齬が生じると言える。

もう一点、この「独り歩き」している図表について。エリクソンにおける発達段階の図表と同様、スーパーにおいても発達心理学等の知見を参照しながら、人の生涯にわたる発達段階とその課題を整理した。各段階の詳細な説明は割愛するが、ここで重要なのは、それに対する批判の形式である。

例えばM.ジャヤシング（2004）では、「ミドル・クラス（中間層）、白人、男性、アングロ・サクソンに関する初期当時の調査の人口サンプルを除いて、このようにきちんと整理された発達過程の配列は、今日の膨大な労働者にはあてはまらないとされている」と述べられ、他にも若松（1996）では「現代の日本に照らしてみると、やはり幾つかのあてはまらない箇所が見られるようである」、少し内容は異なるが藤田（1997）では「このような役割構造をもったキャリアにどういった援助が求められるか」について「実際の方策や手順について紙幅を割かない」ことを指摘している。

少なくとも前二者については、そこで提示されている構図が普遍的なものではない、という点、言い換えれば、社会の変化という原因により、モデルの適合性が低くなったことへの批判である。

振り返ってみれば、この批判の形式は、まさに80年代においてエリクソンが「退場」させられていった、図表や発達段階のモデルを過剰に強調した結果、その普遍性を失わせることになったという状況そのものである。

では、何故スーパーは「退場」させられていないのか。何故、むしろその位置付けが重要になっているのか。その問い自体には明確な証拠がないため推測で答えを出すしかないが、一つにはその発達観の相違が、そしてそこから派生するかたちで浮上する政策的な狙いが、その答えになるだろう。

改めて、発達観の相違について、簡単にまとめておこう。まず、エリクソンにおける発達

は必ずしも具体的な何かを達成・獲得することではなく、「比率」として立ち現れるような現象であった。それは、西平（1993）の言うように、例えば自我の発達というものが、「自我発達だけを取り出して独立に扱うことはでき」ないものであり、同時に「自我にとって重要な意味をもつ他者」の発達でもなければならぬ、という意味で極めて社会的なものであるがゆえにこそ生じる、達成・獲得の難しさである。

ではスーパーはどうであったかと言えば、そこにはまず直線的な連続性が想定されている。加えて、彼が発達課題の達成を具体的な何かの達成・獲得として捉えていたことが、岡田（2003）で紹介されている14の命題の一つ「キャリア成熟は、心理社会的構成概念であり、それは成長から解放までのライフ・ステージおよびサブ・ステージの一連の職業的発達の程度を意味する。社会的視点からは、キャリア成熟は、個人の暦年齢に基づいて期待される発達課題と、実際に遭遇している発達課題とを比較することによって操作的に定義できる。心理学的視点からは、現在遭遇している発達課題を達成するために必要な認知的・情緒的リソースと、個人の今もっている認知的・情緒的リソースとを比較することにより操作的に定義できる」から窺い知れる。

つまり、社会学的視点からは「為すべきこと」と「為していること」との差分として、心理学的視点からは「もっているべきもの」と「もっているもの」との差分として発達の駆動要因を措定した上で、それらを埋めていくことが個人の発達となる。「為すべきこと」とは、「まだ為して（成して）いないこと」であり、その間には「既に成したこと」としての達成がある。そして当然「もっているもの」とは、獲得したものである。その意味で、スーパーの発達観においては、常に具体的な「達成したこと」や「獲得したもの」が付随している。

これが両者の発達観の相違の一つである。もちろん、詳細に検討すれば他にも様々な相違点はあるが、ここではひとまずその点だけをおさえておく。では、このような発達観の違いが、特に、スーパーの理論により強く存在している達成・獲得についての前提がどのような効果をもたらしているのか。

1. 4 キャリア教育とその発達観

先に紹介した若松（1996）では、スーパーへの批判に続けて「特に子ども・青年の時期のキャリア発達が相対的にも絶対的にも遅れていると言わざるをえない我が国では、まだまだ進路指導の課題が山積している。したがって、Super,D.E.らのもののような記述的理論（現状を記述した理論）よりは、進路指導の指針となり得る規範的理論（こうあるのが望ましい、という理論）の方が待たれるのではないだろうか」と述べている。先に紹介した藤田（1997）で指摘された、具体的な援助・支援方策の必要性も、この文脈で言えばスーパーの理論に規範化へのベクトルが小さかったことへの批判であったと読めるだろう。

彼らの指摘は、2003年以降のキャリア教育の盛り上がり以前のものである。そこから約10年後の現在の状況を考えると、彼らの指摘はスーパーの発達観が本質的に持つ規範化へのベクトルを看過していたと言える。しかし、それゆえに、スーパーの理論をより規範的なものとして扱うべきだという指摘として読んだ時に、近年のキャリア教育におけるスーパーの位置付けは、彼らの指摘が実を結んだものであるということにもなるだろう。

つまり、スーパーの理論は確かに「記述的理論」であったが、そこには本質的な規範性が内包されていた。それは、発達を達成・獲得として捉えることが必然的に生み出す、理想（＝

規範)と現実(=個人)との「差分」という思考である。

先に紹介したように、「若者自立・挑戦プラン」以降に盛り上がりを見せているキャリア教育の目標は、①(広義での)近代的自我の確立、②モラトリアム期からの早期脱出、そして③年齢段階に応じた発達(の支援)であった。これらにスーパーの理論を対応させれば、①職業的発達の推進に伴う人格的発達、②為すべきことと為していることとの差分(の減少)、③もっているべきもの(=もっていないもの)の付与、となるだろう。

このように、キャリア教育(の浸透・拡大)のためには、「差分」を埋めることを駆動要因とするような発達観が必要となり、それゆえ、その「差分」を明確かつ一律なものにするためにも、その発達観は規範的なものでなければならなかったと考えられる。

もちろん、それらがいずれも、負の側面をもっていることは指摘しておかなければならない。上の①～③に対応させれば、①責任主体の確定、②準備・猶予期間ではなく、「立ちすくむ」という表現をされるような、消極性の強調、③年齢段階に応じた「脱落者」の特定、といった効果をもっていることは容易に推測できるだろう。

いずれにせよ、キャリア教育においては規範的な発達観が必要となっており、それゆえに、エリクソンではなく、本質的な規範性を内包していたスーパーの理論こそが必要になっていた、とすることができるのではないだろうか。

1. 5 「多元的自己」

それでは、その規範的な発達観や、それを参照するキャリア教育はどこまで有効であると言えるだろうか。本稿ではその限界を時間意識という観点から指摘しておきたい。

ここではまず、以下の分析において、何故「自己多元型」というタイプを抽出したのかについて最初に説明しておく必要があるだろう。

以下の分析を先取りすれば、このタイプは、自己が確立しているという意識をもつ一方で、自己が単一のものではなく、複数あり、さらにそれが可変的でもある、という意識もまたもっているという特徴がある。旧来的な二分法であれば、そこに「真／偽」という構図があるとするか、自己が未成熟であるがゆえの未分化さとするか、もしくはデータそのものに問題があるとして理解するだろう。

しかし、それを一つのタイプとして抽出したのには理由がある。近年の若者論において注目すべきものの一つに「多元的自己」という考え方があり、それが実証的な手続きを経て導き出されたものであること³、そしてそれに続くかたちで他の論者による実証研究も生み出されている⁴こと、これらがその理由である。

では多元的自己とはどのようなものか。若者を理解するための用語として最初に用いられたのは、浅野(1995)においてであった。そこで浅野はいくつかのデータから「個々の文脈においてその都度の自分らしさを表現していながら、そしてそのことを大切なことと感じながら、それらの間に必ずしも一貫性や一元性の保たれていないような、多元的自己の姿」を見出す。

自己の複数性・可変性については、古くはリフトン(1971)が「プロテウスの人間」として、自分が出会うその都度の状況に適応し変化していく若者の姿を指摘したり、浅田彰(1984)では「スキゾ・キッズ」という名前で「スキゾ型というのは分裂型(スキゾフレニー)の略で、そのつど時点ゼロにおいて微分=差異化(ディファレンシエート)しているような」自己の

姿を提示しているように、多元的自己論がその始まりではない。

しかし、ここで重要な点は、浅野が言う多元的自己の姿は、複数性・可変性が前面に押し出された、その意味で分裂症的な自己の姿ではなく、そこに複数性・可変性（への意識）が存在していながらも、ある種の統合が行われているという、分裂と統合、両ベクトルが同時に存在している、という点である。

その意味で、この多元的自己という考えは、例えば「スキゾ／パラノ」といった二分法、ひいては「正常（確立）／異常（拡散）」という二分法を意識的に乗り越えたという点で、若者論に新たな視角を作り出したとすることができるだろう。

また、これ以降それほど直接的に言及されることはないのだが、95年の時点で浅野は自己の多元化に加え、「時間の多元化」という現象を見出している。それは、多元的自己における自分らしさが「その都度の自分らしさ」というものであるゆえに、そこにある自己、そして時間意識は「その都度」の時間に集中したものになり、特権的で単一の時間ではない、多元的なものになる、ということである。

しかしここには重大な誤解の生じる余地がある。つまり、時間の多元性とは、結局のところ、現在中心主義的なものであり、将来を見据えることができていない、もしくは将来を拒否するような意識でしかないのではないか、という誤解である。

本稿における目的の一つには、そのような理解が正しいものであるのか、それとも誤解であるのかという点の検証がある。もし多元的自己が単なる現在中心主義であるとすれば、例えばキャリア教育とは意を異にする、重大な障害となるだろう。しかし、もしそうではなく、時間意識の構造そのものが異なるようなものとして時間の多元化があるとすれば、キャリア教育という行為そのものの障害と言うよりは、それが前提とする時間・発達概念の本質的な問い直しを必要とする現象として位置付くだろう。

このような理由により、本稿においては、多元的自己と呼びうるような、自己の確立性と複数性・可変性とが共存しうる意識構造をもったタイプと、そうではないタイプとが、例えば将来といった時間について、さらには職業生活という未知なるものについて、どのような特徴とタイプ間の相違をもつのかをアンケート調査から得られたデータの分析を用いて確認していく。

1. 6 使用データ・調査時期・調査方法

その際使用するデータは、2006年9～10月にかけて、文部科学省科学研究費助成金（「発達・学習支援ネットワークのデザインに関する総合的研究」）によって行った、北海道札幌市の高校三年生を対象としたアンケート調査の結果である。対象校の選定は、いわゆる学校ランクを参考に、進学校、中堅校、進路多様校の3種類から2校ずつの計6校であり、いずれも、三年生全員を対象とした。方法は、各高校に調査票を配布し、授業時間などに回答してもらい、後日それを回収する、というものをとっている。総回収数は2577ケースで、有効回答数は2439ケース（有効回答率94.6%）であった。

2. 自己意識

まず初めに、自己意識について試してみることにしよう。使用する項目は「あなた自身のことについてお聞きします。以下のことがらがどのくらいあてはまりますか」という計 16 問であり、全て「4. あてはまる～1. あてはまらない」の四点尺度となっている。

2. 1 自己意識の特徴

各質問に対する回答平均値は以下ようになった。数値が大きいほど、肯定的な回答となる。

【表 1：自己意識の回答平均値】

	度数	平均値	標準偏差
自分らしさがある	2394	2.97	0.87
本当の自分は一つとは限らない	2392	2.95	0.95
自分には個性がある	2393	2.84	0.88
新しい性格になりたい	2397	2.46	1.04
一人でいると不安になる	2401	2.26	0.97
個性は出さない方がよい	2392	1.97	0.84

数値の上位下位 3 個ずつを取り出したが、最も平均値が高い項目が「自分らしさがある」であることに注目すれば、自己が確立している（という自信）が見える。しかし、次に平均値の高い項目は内容的に矛盾するような「本当の自分は一つとは限らない」である。

彼らの自己意識はどのような構造となっているのだろうか。

2. 2 自己意識の因子分析

では、これら項目の背後にある潜在的な因子を明らかにするべく、因子分析を行う。因子得点の絶対値が 0.3 未満となっているもの、二項目間にわたって 0.3 以上の因子得点となっているものを排除しながら統計分析を行った結果は以下のようになった。

【表 2：自己意識の因子分析結果】

	自己確立	自己未定	使い分け	依 存
自分らしさがある	0.788	−0.052	−0.015	0.026
自分には個性がある	0.771	−0.015	0.087	−0.035
自分らしさを貫くことが大事	0.545	0.101	−0.128	0.004
どこかに本当の自分がある	0.014	0.847	−0.050	−0.010
本当の自分はまだ隠れている	−0.039	0.690	−0.016	0.016
本当の自分は一つとは限らない	0.074	0.472	0.197	0.010
相手によって性格が変わる	−0.018	−0.021	0.872	0.027
相手によって使い分ける	−0.019	0.054	0.781	−0.029
甘える	0.004	−0.044	0.006	0.682
一人不安	−0.054	0.063	−0.005	0.552
回転後の負荷量平方和（a）	1.564	1.745	1.778	0.851

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子間相関	自己確立	自己未定	使い分け	依存
自己確立	—	0.009	−0.147	0.016
自己未定		—	0.410	0.162
使い分け			—	0.152
依 存				—

これらの結果から、「自分らしさがある」など、自己の確立性に関する因子を「自己確立因子」、「どこかに本当の自分がある」など、確固たる単一の自己というものを否定するような意識に関する因子を「自己未定因子」、「相手によって性格が変わる・使い分け」といった、他者に対する振る舞いに関する因子を「使い分け因子」、「甘える」など他者への依存性に関わる因子を「依存因子」とそれぞれ名づけた。また、各因子の因子相関行列は以上のようになっている。

このうち、特に「自己未定因子」については、もう少し考察が必要となるだろう。この因子に関わる項目は、自己の潜在性や、複数性に関する意識である。だが、因子間の相関係数を見てみると、負の数値とはなっておらず、彼らの自己意識はその安定性・確立性と、不安定性・未確立性とが、共存可能なものとなっていることがわかる。

自己の確立性と未定性とが負の関係となっていないということは、両因子が共に正の数値となっている者が一定数存在しているということだ。該当するケース数は618ケースで、全体(2439人)の25.3%となっている。自己の複数性・可変性と自己の確立性との共存という、先に紹介した「多元的自己」と呼びうるような自己意識の構造をもった者が四分の一を占めるといえるのは、ある程度の広がりをもっていると言えるのではないだろうか。

自己の確立に対しては、それを疑うような自己の未定性は障害となる。それゆえ、一方が強ければ、もう片方は弱まる。それゆえ自己を確立するためには、それを疑うような不安や定まりのなさを解消することが必要なのだ、という関係はここからは見て取れない。むしろ、それらの解消が、自己の確立性の保障とはならない、という関係が見えてくる。

3. 将来意識

次に、将来意識について見てみることにしよう。使用する項目は「あなたは、これから将来を生きていくなかで、次のようなことをどれくらい重要だと考えていますか」という計16問であり、全て「4. かなり重要である～1. 全く重要でない」の四点尺度となっている。

3. 1 将来意識の特徴

各質問に対する回答平均値は以下ようになった。

【表3：将来意識の回答平均値】

	度数	平均値	標準偏差
自分らしい人生	2427	3.77	0.50
適した職業を見つける	2430	3.76	0.49
友人と楽しく生きる	2426	3.64	0.58
仕事に生きる	2429	2.54	0.80
心がけをもたないようにする	2423	2.20	0.76
将来のことはあまり考えない	2425	2.16	0.82

最も平均値の高い項目は「自分らしい人生を送ること」であり、それに続き「適した職業を見つけること」となっている。だが、最も回答平均値が低いものに「将来のことはあまり考えない」が挙げられていることを考えると、彼らが将来意識においては自分のことばかりに

注目して、将来そのものについてはまともに考えられていないとは言えないだろう。

つまり、彼らは確かに「自分らしい人生」や「自分に適した職業」という、現在においてしか特定できないものを求めているが、それが直ちに「将来ではなく現在」という選択にはなっていない、ということだ。

3. 2 将来意識の因子分析

自己意識の場合と同様、因子分析にかける。結果は以下のようになった。

【表 4：将来意識の因子分析結果】

	高地位・収入	自分らしさ	現 在	仕事追求
高い社会的地位	0.791	−0.066	−0.030	0.028
高収入	0.685	0.086	0.043	−0.061
自分らしい人生	−0.024	0.630	−0.092	−0.066
適した職業を見つける	0.041	0.521	−0.082	0.100
友人と楽しく生きる	0.007	0.436	0.104	0.017
趣味をもつ	0.002	0.346	0.125	−0.005
現在したいことをする	−0.005	0.125	0.574	0.015
将来のことはあまり考えない	−0.046	−0.048	0.565	−0.082
心がけをもたないようにする	0.076	−0.054	0.412	0.104
仕事に生きる	0.000	−0.064	0.012	0.722
専門を極める	−0.036	0.100	0.002	0.551
回転後の負荷量平方和 (a)	1.212	1.150	0.917	1.001

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

因子間相関	高地位・収入	自分らしさ	現在	仕事追求
高地位・収入	—	0.618	0.138	0.267
自分らしさ		—	0.151	0.259
現在			—	0.040
仕事追求				—

地位や収入を重視する「高収入・高地位因子」，「自分らしい人生」や「（自分に）適した職業」といった「自分」というものを強く意識する「自分らしさ因子」，現在したいことをし、将来については考えない「現在因子」，仕事や専門性を重視する「仕事追求因子」と名づけた。

確かに「自分らしさ因子」は「現在因子」と正の関係を示している。しかしそれ以上に「仕事追求因子」とも相対的に強い正の関係を持っており、職業・仕事について考えないという意識ではないと言える。ならば、滅私奉公のように、自分らしさ「ではなく」仕事を、という働きかけは、結果的に仕事それ自体に対する意識をも低下させることになるだろう。少なくとも彼らの意識構造においては、自分と仕事という二つは共存している。

それでは次に、自己意識において現れた、自己の確立性と未定性の共存という点について、これらが正の値で共存しているケースを暫定的に「自己多元型」、それ以外を「非・自己多元型」と分けることで、就業意識の構造における相違を確認してみたい。

3. 3 非・自己多元型における将来意識の構造

まず、非・自己多元型における将来意識の構造を、先ほどと同様に因子分析にかけた結果が以下である。因子相関行列については、全体の結果に合わせた順番に変えている。

【表5：将来意識の因子分析結果：非・自己多元型】

	非多元・高地位	非多元・自分らしさ	非多元・仕事追求	非多元・現在
高い社会的地位	0.972	-0.050	0.017	-0.030
高収入	0.517	0.095	0.001	0.088
自分らしい人生	-0.038	0.576	0.005	-0.050
友人と楽しく生きる	-0.017	0.535	-0.031	0.123
暖かい家庭	0.110	0.484	-0.166	-0.053
適した職業を見つける	0.004	0.476	0.203	-0.057
専門を極める	-0.034	-0.009	0.742	0.022
仕事に生きる	0.058	-0.034	0.521	-0.006
現在したいことをする	0.030	0.066	0.040	0.617
将来のことはあまり考えない	-0.042	-0.069	-0.091	0.549
心がけをもたないようにする	0.082	-0.029	0.072	0.398
回転後の負荷量平方和 (a)	1.317	1.199	0.992	0.903

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

因子間相関	非多元・高地位	非多元・自分らしさ	非多元・現在	非多元・仕事追求
非多元・高地位	—	0.171	0.044	0.172
非多元・自分らしさ		—	0.157	0.205
非多元・現在			—	0.015
非多元・仕事追求				—

全体の場合とほぼ同様の因子が抽出されている。全体との比較と解釈は後に行うので、ここで現れた差だけ触れておこう。非・自己多元型における高地位・収入因子と現在因子との関係は、全体において両者は相関係数 0.138 となっていたが、非・自己多元型では 0.044 と非常に弱い関係になっている。

では次に、自己多元型においてはどのような意識構造が現れるのかについて確認しておこう。

3. 4 自己多元型における将来意識の構造

こちらの場合も同様の分析を行った。結果が以下である。

【表 6：将来意識の因子分析結果：自己多元型】

	多元・高地位	多元・仕事追求	多元・自分らしさ	多元・現在
高い社会的地位	1.012	−0.0042	−0.111	−0.027
高収入	0.574	−0.049	0.127	0.134
チャンスを逃がさないようにする	0.336	0.155	0.158	−0.062
仕事に生きる	0.012	0.621	−0.125	0.115
専門を極める	−0.081	0.594	0.010	0.076
どんなことでも挑戦する	−0.013	0.494	0.179	−0.067
社会のために尽くす	0.147	0.410	0.005	−0.172
趣味をもつ	0.044	−0.025	0.485	0.047
適した職業を見つける	0.043	−0.006	0.482	0.006
友人と楽しく生きる	0.038	−0.013	0.479	0.056
自分らしい人生	−0.068	0.030	0.475	−0.081
現在したいことをする	−0.037	−0.026	0.117	0.528
心がけをもたないようにする	0.017	0.153	−0.082	0.512
将来のことはあまり考えない	−0.01	−0.024	−0.049	0.463
不安な要素は回避	0.134	−0.057	−0.043	0.415
回転後の負荷量平方和（a）	1.743	1.562	1.316	1.133

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

因子間相関	多元・高地位	多元・自分らしさ	多元・現在	多元・仕事追求
多元・高地位	—	0.118	0.219	0.294
多元・自分らしさ		—	0.108	0.412
多元・現在			—	0.060
多元・仕事追求				—

こちらもほぼ同様の特徴をもつ因子が抽出された。二点触れておこう。

まず、先の非・自己多元型との比較で言えば、高地位・収入因子と現在因子との相関が0.219と、全体に比べて強くなっている。

また、自分らしさ因子と仕事追求因子との相関については、全体では0.259とそれなりに高い数値となっていたのだが、自己多元型において両者は0.412と、強い関係になっている。

それでは、非・自己多元型－全体－自己多元型を比較した場合、そこにはどのような相違が見られるのだろうか。三つの因子相関行列を一覧にしてみよう。

3. 5 将来意識の構造の比較

因子相関行列の表を並べたものが以下である。全体を中心とし、数値が大きくなっているものは強調してあり、小さくなっているものは斜体にしてある。

【表 7：将来意識因子の因子相関行列：比較】

		高地位	自分らしさ	現 在	仕事追求
高地位・収入	非・自己多元型		0.171	0.044	0.172
	全体		0.168	0.138	0.267
	自己多元型		0.118	0.219	0.294
		高地位	自分らしさ	現 在	仕事追求
自分らしさ	非・自己多元型			0.157	0.205
	全体			0.151	0.259
	自己多元型			0.108	0.412
		高地位	自分らしさ	現 在	仕事追求
現 在	非・自己多元型				0.015
	全体				0.040
	自己多元型				0.060
		高地位	自分らしさ	現 在	仕事追求
仕事追求					

非・自己多元型における高収入・高地位因子は、自分らしさ因子との相関が高く、現在因子、仕事追求因子との相関は低くなっている。このタイプにおける高収入・地位というのは、自分らしい人生といったものとセットになり、その意味で現在よりも将来への意識をもつのだが、一方で、それがそのまま仕事を追求するような意識にはそれほどなっていない。

逆に、自己多元型における高地位・収入因子は自分らしさにはそれほど関わらないが、現在因子と仕事追求因子との間にある程度強い関係をもっている。特に現在因子については、非・自己多元型の場合と比べ、かなり強いものとなっている。

次に、自分らしさ因子について見てみると、それほど強くはないが、非・自己多元型においては現在因子と相対的に強い関係をもっており、仕事追求因子とは相対的に弱い関係をもっている。非・自己多元型における自分らしさは、高地位・収入と現在への意識、仕事の追求へのやや弱い意識とセットになっている。

一方、自己多元型については、現在因子との関係はそれほど強くない。しかし、仕事追求因子との関係はかなり強いものとなっている。自己多元型における自分らしさは、（相対的には）現在よりも将来を、そして仕事を追求する意識とセットになっている。

現在因子については、両タイプ共に仕事追求因子との関係が非常に弱くなっている。相対的には、自己多元型において、仕事追求因子との関係が若干強くなっている。

ここまでの結果を、タイプごとにまとめてみよう。

まず非・自己多元型について。このタイプにおいては、自分らしさは高地位・収入という、いわばステータスに関する意識と関わり、同時に、将来よりも現在という意識と関わっていた。結果的に、仕事の追求という意識については、全体よりも相関が弱くなっていた。

つまり、非・自己多元型における将来意識レベルでの自分らしさ（≡自分らしい人生）とは、仕事そのものというよりは、地位・収入を意識するかたちで、将来よりも現在を意識するかたちで現れている。非・自己多元型においては、自分らしさというのは、単純に仕事を追求するようなかたちでは現れない、極端な言い方をすれば、仕事の追求とは異なるベクトル

に存在するものとして位置づいているのではないだろうか。

では、自己多元型においてはどうかだろうか。このタイプにおいて、自分らしさは何よりも仕事の追求と強く関わっていた。それゆえ、ステータスに関するものや将来よりも現在を、という意識との関係は相対的に弱かった。

つまり、自己多元型における将来意識レベルでの自分らしさは、仕事を追求することと齟齬をきたさないかたちで位置づいている。言い方を変えれば、仕事を追求することは、自分らしさを保つ（実現する）ことを邪魔しない、もしくは支えうるものとして位置づいている。

そして同時に、そのようなものとしての自分らしさは、必ずしも現在に収斂するものでもない。言い換えれば、非・自己多元型のような意識構造においては、自分らしさを証明・担保するものは、現在の自分という内的な基準、もしくは地位・収入という外的な基準、これらに限定されてしまう可能性をもつのだが、自己多元型においては、必ずしもそうではない。

仕事に生きることが、現在の生活とは全く異なるものであったとしても、自己多元型においてはそこに自分らしさを見出しうる。それは何よりも、自己多元型がもつ自己意識の構造それ自体が、断絶を含みこんだかたちでの自己の確立を可能にしているためである。

それでは最後に、将来意識について、先に使用した設問よりも範囲を限定した「あなたは将来の職業生活についてどのように考えていますか」という計18問（四点尺度）を使用し、自分らしさというものの意識が将来意識、特に職業生活というかたちでどのように現れるのかを確認したい。

4. 職業生活意識

こちらについても同様の分析を行う。ただし、本稿での目的が就業意識における自分らしさのあり方を探るものであるため、全体的な傾向は割愛し、自己意識構造における各タイプにおいて、職業生活に関する意識がどのような構造を見せるのか、そしてそれら意識がここまで見た就業意識との間にどのような関係を示すのか、という点を中心に分析を進めたい。

4. 1 職業生活意識構造の比較

まず、就業意識の場合と同様、各タイプにおける職業生活意識の因子分析を行った。各タイプの結果が以下である。

【表8：職業生活意識因子：非・自己多元型】

	非多元・独立	非多元・仕事消極	非多元・出世
専門職として独立	0.950	0.043	-0.052
自営	0.540	0.052	0.144
専門的技術を磨く	0.317	-0.298	0.083
仕事はしたくない	0.074	0.643	0.006
パート希望	0.103	0.506	-0.127
金のためと割り切る	-0.127	0.407	0.273
考えていない	-0.057	0.392	-0.004
高い収入	0.016	-0.062	0.762
大企業で出世	0.105	0.018	0.591
回転後の負荷量平方和（a）	1.391	1.110	1.107

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

【表 9：職業生活意識因子：自己多元型】

	多元・仕事消極	多元・独立	多元・出世	多元・適合
仕事はしたくない	0.682	0.086	-0.105	0.002
のんびりと暮らす	0.589	-0.070	0.043	0.162
金のためと割り切る	0.507	-0.046	0.237	-0.185
パートで働く	0.420	0.126	-0.137	0.074
考えていない	0.406	-0.085	0.058	0.006
人の役に立つ仕事	-0.368	0.055	0.077	0.242
自営	0.032	0.796	0.075	-0.015
専門職として独立	-0.031	0.642	-0.010	0.044
大企業で出世	-0.047	0.136	0.690	-0.118
高い収入	0.001	-0.083	0.666	0.222
合わない仕事ならしたくない	0.192	0.055	0.016	0.383
生きがいをもつ	-0.064	-0.003	0.015	0.326
回転後の負荷量平方和 (a)	1.650	1.160	1.157	0.520

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

抽出された因子数は異なるが、自営業や専門職として独立することを志向する「独立因子」、仕事はしたくなく、するとしても「金のため」と割り切ろうとする「仕事消極因子」、出世や収入を志向する「出世因子」については、ほぼ同内容のものとなっている。自己多元型においてのみ、第四因子として（自分に）合わない仕事を拒否し、生きがいをもつことを重視する「適合因子」と呼びうるものが現れている。適合因子の意味合いは後に触れるが、ひとまず、共通する三つの因子がどのような関係にあるのかについて確認しておこう。

【表 10：職業生活意識因子の因子相関行列：比較】

		仕事消極	独 立	出 世	(多元)適合
仕事消極	非・自己多元型		-0.103	0.122	—
	自己多元型		0.033	0.220	0.152
		仕事消極	独 立	出 世	(多元)適合
独 立	非・自己多元型			0.127	—
	自己多元型			0.146	0.075
		仕事消極	独 立	出 世	(多元)適合
出 世	自己多元型				0.165
		仕事消極	独 立	出 世	(多元)適合
(多元)適合					

非・自己多元型において、当然ながら仕事消極因子は独立因子と負の関係になっている。しかし、一方で収入や出世を意識する出世因子とは弱いながらも正の関係となっている。それは、仕事消極因子においては、仕事そのものに対する拒否もあるのだが、同時に、収入を得る手段として、金銭それ自体を要求するような意識が含まれているためでもあるだろう。

一方の自己多元型においては、仕事消極因子は独立因子と非常に弱い正の関係に、出世因子とやや強い正の関係になっている。いずれのタイプにおいても、職業生活における出世は、

何よりもまず収入の増加として意識されているのだろうか。

両タイプの相違という点では、仕事消極因子と独立因子との関係について触れておく必要があるだろう。非・自己多元型においては正の関係であり、自己多元型においては極めて弱い正の関係となっている。とは言え、非・自己多元型における関係はそれほど不思議ではないだろう。仕事をしないことと、専門職として独立することとは単純に矛盾する。にもかかわらず、自己多元型において両者はそれほど強く相反する関係とはなっていない。

それについては、自己多元型においてのみ抽出された適合因子との関係を見る必要があるだろう。暫定的に適合因子と名づけたこの因子は、「合わない仕事ならしたくない」と「生きがいをもつ」という二つを代表している。二つに共通するのは、内的なもの、自己を基準としたものであるという点である。であれば、この因子が、他三因子全てと正の関係を示すことは、仕事への消極性にせよ、独立志向にせよ、出世（＝高い収入）欲にせよ、それらは全て「自分」に関わるものと判断される限りにおいて成立するものであると言えないだろうか。

とは言え、これらの点についてはもう少し詳細な分析が必要となるが、本稿においてはこれ以上踏み込まないこととする。

次に、これら職業生活意識が将来意識とどのように関わっているのかについて見てみよう。

4. 2 職業生活意識と将来意識

最後に、ここで抽出された因子と、先に抽出された将来意識因子との関係を見る。

【表 11：職業生活意識と就業意識の相関係数比較】

		仕事消極	独 立	出 世	(多元)適合
高地位・収入	非・自己多元型	0.141	0.079	0.608	0.198
	自己多元型	0.072	0.146	0.620	
仕事追求	非・自己多元型	0.121	-0.122	0.176	0.144
	自己多元型	-0.226	0.220	0.225	
自分らしさ	非・自己多元型	0.325	-0.260	0.168	0.395
	自己多元型	—	0.132	0.157	
現 在	非・自己多元型	—	0.298	0.097	0.189
	自己多元型	0.445	0.097	0.356	

はっきりとした相違が現れている点について見てみよう。仕事追求因子については、仕事消極因子、独立因子との関係が二つのタイプの間で正負が逆になっている。

仕事を追求することと、仕事に対し消極的であることが正の関係であるとはどういうことだろうか。その点については、非・自己多元型における仕事追求因子が、独立因子と負の関係、出世因子と正の関係を示していることから推測することができる。つまり、将来の生き方という曖昧な場面での「仕事に生きること」と、職業生活における「仕事はしたくない」「割り切り」といったものは、それほど直接的には繋がっておらず、それゆえに矛盾することもないのではないだろうか。だからこそ、「独立」という具体的(かつ現時点で不明瞭)なビジョンではなく、「出世」という明確なものと正の関係を示しているのではないだろうか。

逆に自己多元型では、将来の生き方と職業生活とが繋がって(もしくは、いずれもが等価なものとして扱われて)おり、将来の生き方における「仕事に生きること」と、もう少し具体的な職業生活という場面での独立や出世とが正の関係を示していると考えられる。

もう一点、こちらの方が重要な点だが、自分らしさ因子との関係における相違が現れている。

非・自己多元型では自分らしさ因子は仕事消極因子と比較的強い正の関係を示し、独立因子と負の関係を示している。一方、自己多元型では仕事消極因子とは有意な関係を示さず、独立因子とは正の関係を示している。

この相違はどういうことなのだろうか。一つ言えるのは、先に、非・自己多元型における就業意識レベルでの自分らしさが、地位・収入を、将来よりも現在を意識するかたちで現れていると述べたが、同じことがここでも見て取れるということだ。非・自己多元型における自分らしさは、将来やそこに含まれる仕事といったものとは負の関係を示すものとなっている。

逆に、自己多元型における自分らしさは、仕事を拒否するようなものとはなっていない。また、自己多元型においてのみ抽出された適合因子との間には、比較的強い正の関係が現れている。これはその意味内容から言っても当然の結果ではある。

もう一点、現在因子についても少しだけ触れておこう。非・自己多元型においては、現在因子は独立因子とのみやや強い性の関係を示し、他二因子については現れないか非常に弱い関係となっている。しかし、自己多元型においては、現在因子と仕事消極因子、出世因子とが強い正の関係となっている。

特に自己多元型について言えば、これらの関係とは多元的自己の特徴である、状況に応じる意識「自己の状況性」の一つのかたちなのではないだろうか。つまり、先に見たように、自己多元型においては現在と将来という断絶それ自体はそれほど意味がなく、現在と全く異なる将来であっても、そこに自分らしさを見出しうる。であれば、現在を重視するとは、現在に適合した状況に適應することとなるだろう。だからこそ、出世や割り切りという、現在においても見える(と思える)ものは正の関係を示しうる。逆に、独立という、まだ見えない未来像とは強い関係を示さない。

いずれも適應すべき状況ないし時間と、重視すべき振る舞いとが合わさったかたちで現れており、その意味でこれらの関係は、多元的自己の特徴である状況志向性を表した結果であると言うことができるだろう。

改めて、職業生活に関する意識との関係から自分らしさの位置付けを考えるならば、非・自己多元型においては、仕事や将来といったものとは負の関係を示すようなものとして現れているのだが、それは、現在と将来とが異なるものであり、しかも自分らしさというものが現在という時間を拠り所としたものであるという構造を浮かび上がらせている。

一方の自己多元型においては、それは仕事を拒否するようなかたちでは現れないが、同時に、その他の職業生活との間においてもそれほど強い関係を示さない。それは、現在因子がもつ関係において特徴的に現れるように、現在と将来は異なるものであるが、自分らしさ自体は現在のみを拠り所にするのではなく、その都度の状況というものを拠り所にしているために、現在とは異なる将来を否定することはない。

このように、自己意識－就業意識－職業生活意識を見てきたが、自分らしさとはどのようなかたちで現れているものであるのか、それが自己意識の構造によってどのような相違を見せるのか、について最後にまとめることとしよう。

5. 「自分らしさ」の意味

5. 1 非・自己多元型における「自分らしさ」

非・自己多元型には、自己が確立しており全く揺るぎのない者も、自己が確立しておらず揺らいだ状態にある者も含まれるが、いずれも自己の確立と揺らぎ（未定性）とが相反する関係にあるという構図はこのタイプに共通している。

そのような自己意識の構造を背景に、就業意識における自分らしさは、仕事の追求とは異なるものとして、地位・収入、そして将来よりも現在というものを意識するかたちで現れていた。職業生活意識においてもまた、仕事や将来といったものとは異なるかたちで現れていた。

いずれにおいても、非・自己多元型における「自分らしさ」は、仕事（の追求）や、将来といったものには向かわない意識として現れている。

そのようなかたちで現れている原因は、自己意識の構造にあるだろう。つまり、自己の確立と揺らぎとが二者択一的であるがゆえに、認識可能なものとしての自己と、現在において直接的には認識不可能なもの（仕事・将来）もまた二者択一的な関係にならざるをえない。

「自分らしさ」とは、何よりもまず現在認識しているものであり、現在に位置づく。一方の仕事は、現在では認識不可能なものであり、将来（＝未知の領域）に位置づく。現在と将来は分断されており、それゆえに選択は二者択一的なものになる。

そのような意識構造は、それほど不思議なものではないだろう。例えば「夢を見ること」について考えてみよう。それは、現在と将来との分断を背景としながら、望む将来の姿に現在の自分を変えていこうとする振る舞いであるとひとまずは定義できる。

その「夢をみること」に対置されるものは「現実をみること」となるだろう。こちらは逆に、現在の自分や状況をもとに、「夢」を変化させることと定義できる。

もしそのような定義に問題がないとすれば、両者は共存不可能で二者択一的である。自分らしさと仕事との関係は、これと同様のものである。つまり、自分らしさと仕事、現在と将来という二者のうちいずれかを選ばなければならない（確定しなければならない）という関係。翻れば、それは自己の確立と揺らぎ、そのいずれかを自己評価というかたちで選ばなければならない、そのような自己意識の構造を背景としている。

では、自己多元型においてはどうかだろうか。

5. 2 自己多元型における「自分らしさ」

自己多元型とは、自己の確立と揺らぎとが共存可能な意識構造をもったタイプであった。

そのような意識構造を背景に、就業意識における自分らしさは、仕事を追求することと共存可能なかたちで、加えて、相対的にはそれほど現在に意識が集中しないかたちで現れていた。職業生活意識についても、仕事を拒否するようなものとはなっていない。

つまり、自己多元型における「自分らしさ」は、それが本質的には現在に位置づくものでありながらも、将来やそこに含まれる仕事というものを拒否するかたちでは現れていない。

自己意識の構造から考えれば、少なくとも自分らしさというものについて、自己多元型においては、現在と将来が二者択一的なものとはなっていない、ということになるだろう。

先に、多元的自己の特徴である「時間の多元化」と「自己の状況性」について触れたが、それは自分らしさにおいて現れていた。時間は、連続性よりも「その都度の時間」という、単

独性をもったものとして現れる。

同時に、自分らしさは固定的で本来的に備わっている確固たるものとしてではなく、状況に応じるかたちで現われるがゆえに、自分らしさと外的な状況とはそれぞれ独立して存在するものでも、ましてや相反するものでもなくなる。

先に使用した例である「夢をみること」について言えば、「夢」と「現実」とは対立項としては必ずしも現われない。自分らしさと将来や仕事との関係のように、それはいずれかを選ばなければならないものではない。ただし、それは単純な先送りではなく、選択が行われる場合もあるだろう。

しかし、時間が「その都度の時間」に多元化されるということは、直近の時間において行われた決定が、それまでの時間の中で最も優れており、同時に、将来的にも変化しないという超越的な「最終決定」であるための根拠が失われる。それゆえ、行われた選択は常に「最終決定」ではないものとならざるをえない。

それでは最後に、これらの異なった二つのタイプ、特に自己多元型について、その現代的な意味を考えることとしたい。

6. 自己の多元性をもつ現代的意味

自己多元型の時間意識は、単純な現在中心主義ではなかった。言い換えれば、「その都度の時間」は、必ずしも現在だけを意識するようなものではなかった。しかし、必ずしも将来だけを意識するものでもなかった。そこにある時間は、過去—現在—未来という異なる時点が、序列なく存在するような、その意味で多元的なものであった。

では、そのような自己意識の構造や時間意識への注目は、キャリア教育や、規範的発達観にどのような示唆を与えるのだろうか。

まず一つに、個人の発達を、獲得したものや達成したことの積み重ねとして理解することが難しくなるだろう。何故なら、このような自己意識・時間意識の構造からすれば、前者は「獲得したもの」ではなく、「獲得したことがあるもの」であり、後者は「達成したこと」ではなく、「達成したことがあること」である。つまり、過去から現在へと自己を物語る時、そこで獲得や達成がエピソードの一つとして引用されるかどうかは、その都度の時間、この場合は物語る時点に依拠する。

①広義での近代的自我の確立、②モラトリウム期からの脱出、そして③年齢段階に応じた発達（の支援）というキャリア教育の各目標に対応させれば、①固有性・不変性をもたないかたちでの自己の確立、②モラトリウム期の主体的選択、そして③年齢段階には限定されない、「その都度の時間」に影響を受けた発達段階、となるだろう。

もしこの三つの相違点を規範的なかたちで評価するならば、いずれにおいても自己多元型は脱落者として取り扱われることになるだろう。キャリア教育が個人の主体性やアイデンティティといったものを無視して、外的な基準・規範に当てはめ、成型することを最終目標とするならば、自己多元型のようなタイプは、極めて強力に教育・訓育することが必要になるだろう。

そして、最も重要なことは、それが「その都度の」状況として強力である限り、そのような外的な基準へはめ込む作業は成功しやすい、ということである。その意味では、キャリア

教育は本質的な問題点を抱えつつも、そこで抱える問題点それ自体はより有効に機能することになるだろう。

その倫理・道徳的是非の判断は保留するが、自己多元型のもつ特徴はキャリア教育と完全に相反するものではないこと、その意味で両者のマッチングは十分にあるのだが、そのマッチングは常に、キャリア教育が「その都度の」状況として強力であり続けることを要請する関係である。その意味で、キャリア教育は完成されることはなく、常に、他の様々な外的条件に対し優位性を持ち続ける、という課題を達成し続けることが必要なものとならざるをえない。

おわりに

本稿において注目してきた自己多元型については、それがどのような原因で生じたものであるのか、それが歴史とともに本当に増えてきたのか、どの程度の広がりをもっているのか、今後増えていくのか、それとも減るのか、などについては本調査の結果からは述べられないし、それを明らかにした研究もまだ少ない。同時に、そこにある「その都度の時間」というものが、他者とのエピソードの共有などの条件で連続性をもちうるのか、など議論すべき点は残っている。

しかし少なくとも、これまで自明としてきたいくつかの考え方（例えば直線的・階梯的な発達論）を問い直す必要があるような性質をもった者が、現時点で少なくともは数存在していることについて、考える必要があるだろう。

もちろん、これら自己意識の構造やそれによって分けたタイプというものは、あくまでも分析的に抽出されたものであり、その意味で時間性も限定されている。自己多元型がこれらも自己多元型のままであるかどうかは分からない。

今後は、このような意識構造をもつ層が、他の場所・属性・方法など異なる調査においても現われるのか、という点を考えながら、この「新しい」自己のタイプについて深めていきたい。

注

- 1 「再登場」と呼ぶ理由としては、先崎（2001）で整理されているように、1960年に主著『職業生活の心理学』が翻訳され、ある程度の影響は与えたが「スーパー博士の理論は大きな影響を与えたが、つい最近まで学校での実践レベルには殆ど反映されなかった」という経緯を元にしている。
- 2 その他にも、藤田（1997）や岡田（2003）など。
- 3 その後も、浅野（2006）など、若者の意識についての系統的な研究が続けられている。
- 4 例えば岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸（2006）など。

参考・引用文献

- ・ 浅田彰 1984 『逃走論 スキゾ・キッズの冒険』 筑摩書房
- ・ 浅野智彦 1995 「友人関係における男性と女性」 高橋勇悦監修, 川崎賢一・芳賀学・小川博司編 『若者たちの東京・神戸 90's 分析篇 都市青年の意識と行動』 恒星社厚生閣
- ・ 浅野智彦編 2006 『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』 勁草書房
- ・ D. E. スーパー 1957, 日本職業指導学会訳 1960 『職業生活の心理学』 誠信書房
- ・ 藤田晃之 1997 『キャリア開発教育制度研究序説 戦後日本における中学校教育の分析』 教育開発研究所
- ・ 岩佐淳一 1994 「社会学的青年論の視角——一九七〇年代前半期における青年論の射程」 小谷敏編 『若者論を読む』 世界思想社
- ・ 岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸編 2006 『若者たちのコミュニケーション・サバイバルー親密さのゆくえー』 恒星社厚生閣
- ・ 小谷敏 1994 「モラトリアム・若者・社会ーエリクソンと青年論・若者論」 小谷敏編 『若者論を読む』 世界思想社
- ・ 栗原彬 1981 『やさしさのゆくえ＝現代青年論』 筑摩書房
- ・ M. ジャヤシンゲ 2001, 小林勝・村上良三訳 2004 『キャリア・ガイダンスとカウンセリング 英国に見る理論と実践』 同友館
- ・ 文部科学省 2003 「若者自立・挑戦プラン」
- ・ 西平直 1993 『エリクソンの人間学』 東京大学出版会
- ・ 岡田昌毅 2003 「ドナルド・スーパー 自己概念を中心としたキャリア発達」 渡辺三枝子編 『キャリアの心理学』 ナカニシヤ出版
- ・ R. J. リフトン 1967, 外林大作訳 1971 『誰が生き残るか プロテウスの人間』 誠信書房
- ・ 先崎武 2001 「わが国の進路指導及び相談研究への D. E. スーパーの貢献」 文教大学教育研究所 編 『教育研究所紀要』 10
- ・ 中央教育審議会 1999 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」
- ・ 山田兼尚 2007 「生涯にわたるキャリア教育」 国立教育政策研究所編 『キャリア教育への招待』 東洋館出版社
- ・ 柳井修 2001 『キャリア発達論 青年期のキャリア形成と進路指導の展開』 ナカニシヤ出版
- ・ 若松養亮 1996 「キャリア発達の理論」 城仁士・那須光章編 『総合的学習への提言 3ー教科をクロスする授業ー「キャリア発達と産業教育」理論と方法』 明治図書